

梶井基次郎「檸檬」論

——「触媒」としての〈檸檬〉とその力——

藤 村 猛

はじめに

梶井基次郎の「檸檬」は、代表作だという世評の割には、読解しにくい作品である。その原因は、例えば、棚田輝嘉氏の考察^①にあるように、「檸檬」内に貫流する作者の「小説的な〈物語〉」への志向と、作品内の「即自的な出来事についての即自的な語り」という、作品中の「内包している二つの層が、読みや評価を二分させている」という作品構造の分裂の為と考えられる。確かに、この作品は主人公の持つ感性や、母胎である「瀬山の話」との関連^②から考察されがちであり、読み手は青春の一時期に通底する感傷性に共感を覚えたり、同時にそれを超える「不吉な塊」や主人公の感性・想像による力に瞠目するのが普通である。その結果、棚田氏の言うように「作品の主題に対する論究はほとんどみられ」ないとの結論も、ある面では否定できない。換言すれば、作中の「不吉な塊」や、主人公の

感性・想像による、また、拡大して言えば、「檸檬」という作品の力が、今までに十全に解明したと言いつてもできない。ここを十分に解明することが、「檸檬」読解の中核ではないかと思われる。この作品は、基本的に主人公で語り手の「私」の物語であり、「私」が時間軸を自在にして、ある瞬間の自己と関わる対象を語るという物語でもある。作品の中心は、「不吉な塊」に苦しむ彼が、果物店で買った一個のレモン（物としてはこのように表記、以下同じ。）を得た後に変化する様々な感情にあり、その複層的描写にある。作中で彼は言う。

それにしても心という奴は何といふ不可思議な奴だらう^③。

——つまりは此の重さなんだな。——（略）この重さは総べての善いもの総べての美しいものを重量に換算してきた重さであるとか、思ひあがつた諧謔心からそんな馬鹿げたことを考へて見た

りー何がさて私は幸福だったのだ。

かくの如く呟き、自分の「心」の動きに驚き、やがて丸善で奇怪な企みにはくそ笑む主人公の有り様をどう捉えるか。浜川勝彦氏が言うように、この作品は『私』が述べする『心』の彷徨を定着したものである。そこには、自己を執拗に点検してきた者の心の動き、感動が描かれているが、それらは、畏怖の念に連結していくと言っても良いのかもしれない。

また、作品冒頭から設定された重い雰囲気にも拘らずの、語りの軽い表現にも、この作品の特色、ひいては作者の創作意図がうかがわれるし、「心」の追究と共に、結果的に両刃の剣である彼の鋭すぎる感性や想像力をも、考察せざるを得ないだろう。ある時は想像の力によって、異郷の地―京都の地から仙台あるいは長崎―に自分を連れ出すが、それは自分を見る自分といった存在のように、見方によると自己分裂の有り様をも連想させるし、彼が執着するささやかなもの―花火やびいどろなどは、ある種の詩美をもたらす。だが、それらは彼を幸福に導かない。「不吉な塊」に苦しむ彼をして、自己欺瞞とは言わないまでも、瞬間的に「今」を忘失させ慰めるに過ぎない。

対して、レモンを手にした時はどうか。同様に、瞬間の幸福で虚しい現象にすぎないのか。例えば、「檸檬」の母胎であった「瀬山の話」（「檸檬」）の末尾で述べられているように、それは「狂人芝

居」だろうか。「瀬山の話」と「檸檬」の違いについては考察を割愛するが、レモンを手中にした主人公の感動は、譬えて言えば、生命を手にしたと同レベルのものではないか。追究すべきは、そう実感させる作品の力である。

本稿は、「檸檬」の力の一端を、浜川氏が言う三度の「檸檬の質の転換」、即ち、物としてのレモンというレベルを超えて、筆者の結論風に言えば、「触媒」、ひいてはある種の「依代」としての力を発揮する〈檸檬〉（「触媒」・「依代」としての機能を果たす場合は◇で表記する。以下同じ。）へと変容する過程と、その後の有り様、そして、主人公が如何に関わりとうとするかを通して、解明しようとする試みである。

—
はじめに、レモンに出会う前の主人公の状況を、簡単に確認しておく。

主人公を襲う「不吉な塊」は、当時の雰囲気や若者特有の特性にもよるが、やはり主人公に固有のものである。青年期には、自意識によってある種のポーズを取りがちだが、皆が「不吉な塊」を背負う訳ではない。彼の場合、初めは本人のコントロール下にあったものが、何時しか、どうしようも出来ない領域に入ってしまったのではないか。この領域を描いた作品は他にもあるが、「檸檬」の特

異さは、それに因わっていく意識の有り様の追究の深さであり、かつ、その豊かな表現力である。「檸檬」の主人公は、自らが招いた行き詰まりの中で苦悶する。

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧へつけてゐた。

焦燥と云はうか、嫌悪と云はうか―酒を飲んだあとに宿酔があるやうに、酒を毎日飲んでゐると宿酔に相当した時期がやつて来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くやうな借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。(中略) 何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けてゐた。

この冒頭の一節が、主人公の自己認識を表している。自分の心を圧へつけている「不吉な塊」、これが「いけない」と彼は言う。それは、「酒を飲んだあと」の「宿酔」とも譬えられ、ここでは病氣も借金も、彼にとって「酒を毎日飲んでゐる」行為と同レベルのものに考えられている。宿酔が、人生にとって不可避のものとして評価されないように、「不吉な塊」も他者からは評価されにくい。ただ、酒飲みが好んで宿酔になるのではないように、「檸檬」の主人公も好んでなつた訳ではない。だから、彼は、自分の陥つた状況と他者の目の存在の自覚をも持っている。それは、次の一節からもうかがわれる。

ある朝―其頃私は甲の友達から乙の友達へといふ風に友達の下宿を転々として暮らしてゐたのだが―友達が学校へ出てしまつたあとの空虚な空気のなかにぼつねんと一人取残された。私はまた其處から彷徨ひ出なければならなかつた。何かが私を追ひ立てる。

彼は、友達に「取残された」と思う孤独の中で、「何か」に追ひ立てられて町をさまよう。冒頭の段落にも登場する、この「何か」とは何だろうか。

それは、ひとまず「不吉な塊」と指摘できるかもしれない。だが、それでは何故、文中で「何か」と表現するのか。どうして「不吉な塊」と、主人公は言わないのか。「何か」イコール「不吉な塊」ではないのではないか。「不吉な塊」以外のものを含む「何か」、つまり、「不吉な塊」に押えつけられていた「心」をも含む「何か」なのである。文脈から考えれば、かつて宮内豊氏が説いたように、「良心」と言つても良いだろう。「落魄した私」、「生活が蝕まれてゐなかつた以前」という風に、主人公は、後日に「あの頃」と呼ぶレモン体験時を、それ以前の相対的に健全だった過去と比べて表現している。自己呵責の念が、この「何か」に加わつていよう。だが、これはいささか奇妙なことである。「心」は「不吉な塊」に圧迫される被害者だけでなく、彼を罰する加害者でもあるということである。その時、それらに追ひ立てられる「私」とは何か。「心」の

保有者にして、「不吉な塊」の保有者でもある。この一見矛盾した関係が、レモン体験時によりあらわになる。

二

主人公がレモンを持った時の感動は、次のように表現される。

始終私の心を庄へつけてゐた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛んできたと見えて、私は街の上で非常に幸福であつた。あんなに執拗かつた憂鬱が、そんなもの一顧で紛らわせる。―或ひは不審なことが、逆説的な本当であつた。それにしても心といふ奴は何といふ不可思議な奴だらう。

「不吉な塊」が「いくらか弛んでき」て、いささか不審でありながらも、「私は街の上で非常に幸福」になる。そこから生じる彼の感嘆は、引用文の最後の一文に凝縮されている。

この不思議さの念は、これで終わる訳ではない。「心」だけでなく、「身体」にも感じられていく。彼はレモンを握ったり、嗅いでみたりする。「身内に浸み透つてゆくやうなその冷たさは快いものだつた」し、「ふかふかと胸一杯に匂やかな空気を吸ひ込めば、ついで胸一杯に呼吸したことになかつた私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇つて来て何だか身内に元気が目覚めて来たのだつた。……」となる。レモンによる身体への効能である。彼は不思議でならない。実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が、ずっと昔からこ

ればかり捜してゐたのだと云ひ度くなつたほどしつくりしたなんて私は不思議に思へる―それがあの頃のことなんだから。

彼は二重に驚いている。レモン体験の日、その後日と二回に渡つて、自分の心の動きの不可解さに驚き、「心」の奥深さや不可思議さをかみしめる。彼は身体の好調に支えられ、ますます高揚していく。

私はもう往来を軽やかに昂奮に弾んで、一種誇りかな気持さえ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のことなど思い浮かべては歩いてゐた。(中略)

―つまりはこの重さなんだな。―

この重さこそ常づね私が尋ねあぐんでゐたもので、疑ひもなくこの重さは総ての善いもの総ての美しいものを重量に換算してきた重さである。(以下略)

彼とレモンは、世界の中で緊密に結びつく。この時、レモンは大きな意味と存在感を持ち、「私」はレモンによって高揚する。「不吉な塊」の存在に象徴される如く、分裂していた「私」は、「不吉な塊」の魔力から解放され、陶酔の中で再び統合される。「不吉な塊」からの解放と言うよりも、すべてが溶け合つた、融合したと言つた方が良いのかもしれない。

もちろん、そういう高揚感に対して、「思ひあがつた諸諳心からそんな馬鹿げたことを考へてみたり」と、ある程度の相対化が為

されているが、基本的に、この高揚感に主人公にとって好ましいものであり、すべてはレモンを持って高揚する自分への、後日の次の感慨―「何がさて私は幸福だったのだ。」―に収斂していき、前出の驚きや「心」への探求は、それ以上は行われぬ。

その理由としては、レモン体験への尊重の念と、それが日常的に起こるようなものではないことが考えられる。前者は前出の「何がさて私は幸福だったのだ」の口吻からもうかがわれるだろう。この過去への思いには、語り手のある種のいとおしさの念があるようである。後者について補足すれば、こういった体験が彼自身にとって不思議な出来事であり、その種の体験は意識して起こそうとしても、容易に起きるようなものではなかったことを示していよう。確かに、彼の想像が力を貸したのも事実であるが、彼は圧倒的なものを、即ち、自分の意志や努力で簡単に得られるような類いではないものを、レモンから受け取ったのである。

つまり、「不吉な塊」によって彷徨した過去の自分が、レモンによって救われたとの愛惜の念と、その体験が非日常的なできごとであり、かつ不可思議で圧倒的であるが故に、輝くのである。

三

だが、レモンを手にした主人公の高揚は長くは続かない。彼が往來から丸善に入っていくと、次のように変わる。

然しどうしたことだらう、私の心を充たしてゐた幸福な感情は段々逃げて行つた。香水の瓶にも煙管にも私の心はのしかかつてはゆかなかつた。憂鬱が立て罩めて来る、私は歩き廻つた疲労が出て来たのだと思つた。

レモンによる高揚感には、少しずつ薄れていく。身体の疲労が「幸福な感情」を追放したと、彼は思う。また、ここで、彼の心は「のしかかつて」ゆく主体として認識されているように、ある種の客観性をも有している。つまり、彼は自分の状態を分析・認識しつつ、ある程度醒めているのである。

この後、彼は憂鬱を晴らそうと、レモンで試すこと（「第一のアイデア」）を思い付き、「軽やかな昂奮」を得て、本で「奇怪な幻想的な城」を作り、レモンを置く。すると、レモンは「カーンと沓えかへつて」、丸善の中の空気が「檸檬の周囲だけ変に緊張して」いく。範囲は限定されるにせよ、それもレモンの力であり、周辺を変容させるという能動性を有している。ただ、それは身体の疲労を越えた作用であるが、「軽く跳りあがる心」というレベルに留まる。先程、往來でレモンを手にした時のような、彼自身が不可思議に思う程の陶酔感とは、いささか異なる。

次の「不意に」「起つた」「第二のアイデア」は、「私」を「きよつとさせ」「変にくすぐつたい気持」にして「類笑ませ」る。彼はレモンをそのまま、丸善に置いて外へ出る。彼はレモンが「黄金

色に輝く恐ろしい爆弾」で、自分が「奇怪な悪漢」だと見立て、この「想像を熱心に追求した。」これも先程の往來の時のような圧倒的な感動とは違ふ。レモンを持った際は感動に陶酔し、幸福感は不意に訪れたのである。丸善の「二度目のアイディア」も不意に起こるが、その時はそれに「頬笑」み、「想像を熱心に追求し」て面白がるのである。つまり、前者は主人公の想像をも巻き込んで、実感を以て彼を揺さぶり、自己を変容させるのに対して、後者は想像を追求することによって、世界を変容しようとして、その想像を楽しむのである。前者は彼にとつて、心身共に「事実」であるが、後者は想像の世界を通じての「事実」である。つまり、彼は想像で世界の変容を楽しむだけで、その事実―レモンの爆弾で気詰りな丸善が爆発すること―を心底から信じている訳ではない。「瀬山の話」の中の「愉快な時間潰し・馬鹿げた気持」という領域と一歩離れている地点に、それはあろうし、別の場所への錯覚による私自身の見失いの楽しみと、本質は変わらないだろう。

それでは、丸善で二つの「アイディア」をだす主体は何か。還元して考えれば、想像を追求する主体は何か。

「不吉な塊」でも、それに押えつけられる「心」でもなからう。当たり前のようだが、両者を見つめる、広い意味での「私」であろう。つまり、「不吉な塊」や「心」も、結局は「私」であり、同時に、それらを見る「私」も「私」であり、この同時存在の状況（構

造）に、「檸檬」の「私」の心の構造の特色がある。また、この時の「私」は、意識のレベルにおいて、「心」や「感情」・「身体」などの「自己」を凝視しており、小規模ではあるが、解体や融合を繰り返していると見て良いだろう。ただし、自己への客観性によって解体・融合しているが、レモンを手にした時ほどの統一感（陶酔感）はないだろう。ただ、両者の場合に、「心」の運動から付随して生じる快楽は注目に値する。

この快楽とは、別の何かになることによる。即ち、現実や物質レベルを超えて、「私」が他者になることにより、今まで「心」を「任へつけてみた」「不吉な塊」は溶解し変移し、「心」も対象と一体化する。その中核に「私」が意識として存在し、現象的に「他者（他事）」が「意味」を持つて、姿を見せる。「檸檬」の場合、レモンとの一体化・融合による。特に、回想というフィルターを通した時は、それは複雑化する。この時、触媒としての働きを持つて「檸檬」が、「私」に別の「私」を見出させ、新たな「意味（解積）」を生じさせ、複合的に、レモンも新たな意味を持つのである。それは本来的には、種々の解積であり得るのだが、意識が多存在であり得る時には、それは相互に変移・融合し合い、結果的に、苦痛を超えて快感を生むのである。つまり、苦痛は解体され再編成される時、快感に転嫁される可能性を持つのである。「檸檬」の「私」が往來でレモンを手にした時、「不吉な塊」による苦痛は、レモンによって溶

解し、快感に昇華する。丸善での場合、そのきっかけは「私」の「想像」であり、源は「不吉な塊」を含む「私」の存在である。それらが、レモンの存在によって状況を組み替え、世界を変容させ、「私」に快感をもたらす。しかも、注目すべきは、それが往來の時と同様に、時間的に自在なことである。

四

「檸檬」の主人公を苦しめる「不吉な塊」への処方箋とは何だろうか。前節の言説と食い違うように見えるかもしれないが、レモン体験の後、主人公が「不吉な塊」から、簡単に脱出できたとは思えない。何故ならば、「不吉な塊」は、彼の観念レベルから生理的レベルまで根が深く張っていると考えられるからである。故に、仮に主人公が世俗レベルで立ち直っても、「不吉な塊」は消失しないのではないか。それ程、それは彼の本質と結びついたものと考えられる。

しかし、見方を換えてみれば、彼は「不吉な塊」を放そうとしないかもしれない。「心」がそれに圧迫され、苦しんでいるのも事実であるが、それが彼に緊張をもたらし、彼たらしめているとも言えるのである。換言すれば、「不吉な塊」抜きで「檸檬」の世界は成立しないように、それが作品の不可欠の要素と言っただけではなく、「不吉な塊」が作品創造の一原動力ともなっているということである。

る。主人公はそれに振り回されている自己を自覚しつつ、逆にその存在を梃子にして語っている（即ち、作品化する）のではないか。（また、それが、後日の回想という余裕以外にも、彼の軽い語りの調子に結びついているのではないか。）つまり、彼にとって、一見敵に思えるものが、この作品の緊張度・結晶度を高めている。この点を拡大して言えば、彼の意識の重層構造、内部の「心」や「不吉な塊」の関係、はては彼の生理や社会的存在などによって、それらが相乗効果を起こし、作品世界を深化・複層化させていよう。故に、結果的には「私」の不可思議な追求が、作品中に社会や時代との交錯を潜めさせているのではないか。この作品は単に、落第生の告白を描いているのではない。彼は社会に背を向けようとしているのではなく、彷徨することによって消極的のだが、社会や時代と関係し格闘しているのではないか。

例えば、彼のおほじきや火花への愛着は、幼児退行現象にも自閉的な極私的な行為にも見えるが、「見すばらしく美しいもの」で、自分の触覚に媚びてくるものへの実感の底に、彼の悲しみが感じられる。ここに揺曳しているのは疎外感や孤独感である。そこでは、他者や社会、ひいては時代が、彼を取り残して進んで行くのである。一見、彼は時代に背を向けて、ささやかなものに逃避しているかのようであるが、彼は、自分に媚びてくるとは自己慰安であることを知っており、その知覚は自己批判に通じている。この空虚で宙ぶら

りんと自己認識は、結局は、社会や時代への自身の関わりの一つの表徴である。社会は時代は様々に彼を傷つけるが、そう認識すること、即ち、自分の位置を知っているということで、彼はわずかに慰安される。だが、彼はそれに満足できず、そこから踏み出し、何かを求めて彷徨する。結果として、追い立てられた彼は、変身をめざすのである。それが彼の誠実さの証明であり、彼の持つエネルギーの存在を暗示し、同時に、作品の読み手を動かす力となる。つまり、主人公は、弱さを含めて、自己を凝視し格闘することによって、他を動かしていく。「檸檬」の力の一つはこれである。

それ故に、主人公に近い読み手は、そこに自分の姿を見るだろう。その時、読み手は主人公を通じて、自分自身を知り、彼と共鳴する。はなはだしき場合は、両者は一体化を起こすだろう。極端な場合の「檸檬」の力である。

逆に、「檸檬」の主人公の状況と遠い読み手にとっては、作品の力は弱くなる。何故ならば、この作品は長編小説とは違い、人生や社会を総体的に描いているのではなく、主人公のある瞬間を描いている短編小説だからである。しかし、その瞬間は狭いが深い。そういった意味で、「檸檬」は、遠い読み手にも突き刺さっていく。

五

最終場面で、主人公は京極を下って行く。しかし、それは街をさ

まよう敗北者の足取りではない。多くの論者が言うように、彼は「檸檬」の世界を通過することで、一種の通過儀礼を終え、変身を遂げたのではないか。

何かに追い立てられた彷徨から、レモンと遭遇し、他と違う自己を造形・確認すること、これはささいなことではない。一つの体験によって、彼は以前とは変わった自分を発見するのである。つまり、彼はレモンを手にした時に、それによって、大きな力を与えられ自らを変容し得た。そのことが、後の彼を変える。(同様に、丸善の彼は、小さいが第二の変身である。)だが、彼もレモンも、単独の存在ではあそこまで力を持たないだろう。両者が、ある意味では必然的に出会って、相乗的に両者が変容し、互いに「意味」を持ち合い、やがては「場」そのものをも変容し得る力を持ったのである。

その現象は究極的には謎である。だが、彼は不審感を持ちながらも、感嘆し受け取る。その時、レモンは触媒としての力を持つ。しかも、彼は、一種の力を宿す「依代」の機能を果たすものとして、レモンを受け止めたのではないか。彼を「不吉な塊」から解放し、幸福たらしめるもの、それは様々な名前が付けられよう。問題は、それが「触媒」、ひいては「依代」の如き機能としてレモンに発現し、彼が純化・浄化されることである。その時、檸檬は林淑美氏の言う如く、「全世界の重さ軽さすべての善悪美醜を吸収して檸檬は世界に屹立する」のである。と共に、この檸檬は一種の思

寵の如きものではあるまいか。それはまた、「不吉な塊」に苦しむ主人公の特権かもしれない。だからこそ、彼は後に丸善でレモンを使って、今度は世界を変容せしめようとしたのである。自らが浄化されて、初めて、世界は新しい「意味」への道を開く。言い換えれば、〈檸檬〉は新しい世界を創造するのである。

また、これが、彼の表現の秘密を解明する一端ではないか。他者が容易に真似できないのは、それが「不吉な塊」に苦しみ、解体し統合する自己を凝視し続ける者へののみ、可能な表現だからである。つまり、単に技術の問題ではなく、苦悩から浄化される、いわば凝縮した生の表現だからである。彼のすべて一矛盾して働く感性や心の動きなどを含む一が、そこに込められている。分裂し融合する者のみが感覚を研ぎ澄まし表わせるもの、それが「檸檬」の表現である。

彼は自分の想像の現実化を、即ち、想像物を見ること（実現すること）を執拗に求める。と共に、ある瞬間に「触媒」（依代）が現前化して、主人公を救済する恩寵として存在する。作品中に主人公の問いかけの答えがなくとも、読み手に衝撃と共感を与えるのも、それ故である。

別の面から言えば、「檸檬」の表現は、「不吉な塊」によって、生の振幅を増大し解体・融合する存在と、ある時は彼を慰め輝かすが、時として逆に、底に引きずりこもうとする感性との攻めぎ合いと、

恩寵的解放の中から生まれてきたのである。

六

自明のことだが、「檸檬」は、主人公である「私」の語りにより話が進展する。しかし、本稿の「はじめに」でも触れたように、その時間系は固定しているのではない。話の主場面であるレモン体験一往来から丸善での出来事まで一を、それは語りの時点から言えば過去であるが、仮に作品の「現在」（リアル・タイム）とすれば、過去一現在（レモン体験時）一未来（語りの時点）と、作品は語りの主な対象として、「現在」を中心として語られていることになる。だが、「私」は作中で自在に過去（厳密に言えば過去の過去）を持ちだし、「現在」を語る。しかも、そこには、未来一現在と繋がりが得る未来一からの語りも混入している。この時間的に膠着していない語りの構造は、作品の内容と相関関係にあり、互いに機能し合っている。

つまり、内容的には、「不吉な塊」に苦しむ「私」が、レモンの存在により高揚し、「心」の不可思議さを発見し、自己を統合・浄化し、想像により、やがて世界を変容する。だが、それが、レモン体験の特異さを考慮するにしても、絶対的な一過性のものとは言えない。回想時（相対的には未来）では、「不吉な塊」にレモン体験時ほど苦しめられてはいないようだが、その再度の跳梁がない

ことを誰が保証できようか。「心」の不可思議さを知る主人公であれば、なおさらである。つまり、可能性としては、何度でも起こりうるという循環可能の話であり、時間的にも行ったり来たりする往還する物語と見ることも可能なのである。

具体的に言えば、「不吉な塊」が根を張っている「現在」の状態は、未来においても、彼の受け止め方に違いはあるにしても、「不吉な塊」が存在する以上、「現在」なのではないか。しかも、同様に「現在」もレモン体験による「心」の超出で、「過去」・「未来」と繋がり、起こり得る可能性によって、「未来」が「現在」に、かつ、回想というフィルターの力によって、「過去」に通じ得るのではないか。この可逆性に「心」が重なる。その時、時間は作品を支配するのではなく、新たな地平を拓いていくのではないか。比喩的に言えば、「心」が時間を超えていくのである。それは、「檸檬」という作品世界の時間が、「私」と同様、自在に解体し融合し得る可能性を潜めていることを意味する。作品内部が流動しているというだけではなく、過去・現在・未来の主人公が交錯し得る、ひいては、作品と読み手が交流し得る「場」を有するのである。これも「檸檬」の力を生む一つの特徴であろう。

作品最終部で、「私」は京極通りを下って行く。リアルタイムでは、レモン体験は一回のものだが、前述したように、「心」のレベルでは、可能性として何度でも起こり得るのではないか。それは、

単に記憶というレベルだけではなく、彼の「心」と「不吉な塊」の激しい相克が再現されれば、再び、「触媒」(「依代」)としての「檸檬」が登場してくるのではということである。つまり、「不吉な塊」や「心」が存在し、かつ、相関的に解体・融合する自己の運動が存在する限り、「私」は「触媒」(「依代」)としての機能を有する「檸檬」と遭遇して、自らを変化させ、新たな世界を見せ得るのではないか。それは、我々人間存在の「自由」だと言っても良からう。その時、彼の感性は、従来、考えられてきたように絶対の支配者ではない。自己への凝視、換言すれば、その彷徨・憂鬱への自覚と変容への要求の深さが共存・共振すれば、突破口としての「触媒」(「依代」)が、幸福(生)の表象として「私」の求めに応じて姿を表すのではないか。

逆説的に言えば、「触媒」(「依代」)を得るという不幸に耐える勇氣を持てば、レモンは「檸檬」と化す可能性がある。主人公は、己が不幸に耐え待っている。それは自己を凝視しつつの、想像力を最大限に研ぎ澄ませながらの態勢である。

仮に、ここで梶井自身を持ち出すならば、「瀬山の話」に描かれたような狂乱は、どうやら一時期に噴出したものだったらしい。彼の書簡から、そういう推定が成り立つ。だが、「檸檬」のテキストではそういうことは不明であり、テキストはレモン体験とその前後という時間域を出ない。しかし、比喩的に言えば、前述したよう

に、時間はその限られた中で「自由」なのであり、かつ、彷徨し凝視し踏み出す自己を抱える者に、世界を変容させる道を開き、新たな「意味」を見せるのである。

七

以上の考察の結果、次のようなことが言えるのではないか。

「檸檬」の力とは、「私」―内部に「不吉な塊」や「心」を含む―という不可思議な存在をベースとして、偶然のように見えるが必然的な求め（変容への自己要求）に応じて、突如として訪れた「触媒」（「依代」としての「檸檬」）により、新たに「意味」を得て自己や世界を変容させ、主人公の統合という「場」を形成する、と同時に、過去・現在・未来という循環可能な時間の自在さと相まわつての、種々のベクトルの複合体（表現体）なのである。しかも、その表現は、研ぎ澄まされた感性を含む、一人の人間の生の凝縮から生み出され、語り手の想像力により、豊かで、かつ軽快なものとなる。もちろん、これら以外のものからも「檸檬」の力は生じようが、これらが主軸となり、「檸檬」という作品世界が作られ、読み手を揺さぶっていくのである。

再度言えば、この時、主人公は自分の位置を自覚している。その自覚は「瀬山の話」のように、演技する自分と距離を置いてのものではない。結果的には、対象と一体化して融合する自己としての位

置を、やがて、自己の変容をも自覚する。そこでの彼は、凝視しつつ融合する存在であると同時に、時間が彼を包んでいる。時間を支配していると言うよりは、時間と共に在ると言った方が良いだろう。しかも、彼は、可能性として、〈檸檬〉の出現を得ているのである。凝縮された「生」を原動力に、それらが的確で華麗な描写で彩られ、作品に、より不可思議にして真摯で豊かな世界が広がり、読み手の目を魅惑するのである。ここに、「檸檬」の描写の魅力がある。

こういった点に着目すると、この作品が「瀬山の話」から生まれたことは確かにしても、「檸檬」は「瀬山の話」を超えて別のものであったと言えよう。つまり、「檸檬」は「瀬山の話」の一部の独立でも翻訳でもない。この作品は自立して存在を主張しており、それは、作者である梶井も認めているよう。その証拠に、梶井は「檸檬」を世に送り出すが、母胎となった「瀬山の話」はそのままにして、梶井の生存中、完成されることはなかったのである。

「檸檬」は、前述のものを中心として鮮明にされる独自の世界、あたかも三次元方向軸が形成する「場」の「劇」（ドラマ）として、屹立しているのである。

〔注〕

① 梶井輝嘉「物語への意志―梶井基次郎〈檸檬〉―」（『日本近代文学』平 8・5）

② 梶井の作品に表れた感性については多くの論考があるが、特に磯貝英夫

氏の次の論考に多くの教示を得た。

- 磯貝英夫「感性の形式―梶井基次郎」(『国文学』 平2・6)
③ この点に関しては、古閑章氏の考察が詳しく、また、鈴木貞美氏の考察にも参照すべき点が多い。

古閑章『梶井基次郎研究』(おうふう 平6・11)

鈴木貞美『年表作家読本―梶井基次郎』(河出書房新社 平7・10)

- ④ 以下、梶井の作品の本文引用は、『梶井基次郎全集』(筑摩書房 昭41)に拠る。その際、漢字は新字体に直した。

⑤ 『鑑賞日本現代文学 梶井基次郎・中島敦』(角川書店 昭和57・1)

⑥ 注⑤に同じ。

⑦ 宮内豊「檸檬と爆弾」(『早稲田文学』 昭44・9)

- ⑧ この点に関して、林淑美氏は「全世界の重さ軽さすべての善悪美醜を吸収して檸檬は世界に屹立する。それは『私』の〈志向性〉に満ちた世界の象徴であり、即ち『私』の〈自我〉そのものである。」と述べる。「檸檬は世界に屹立する」、及び「世界の象徴」との見解に、筆者も賛同の立場にある。

- ⑨ 林淑美「現象学の近代―梶井基次郎の場合―」(『日本近代文学』 平6・10)
大正12年1月28日の梶井の書簡参照。

— ふじむら・たけし、安田女子大学助教授 —